

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	広瀬 悠三
論文題目	カントにおける世界市民的地理教育の人間形成論的意義の解明 — 経験的働きかけとしての教化の基底性に着目して —		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>従来のカント教育学の研究は、カント自身が「教育の計画の構想は世界市民的でなければならない」と論じていたにもかかわらず、世界市民的教育と切り離されて論じられてきた。それにたいして本論文は、カントの世界市民的教育の課題を解明し、その課題実現のためにカントが地理教育を中心に位置づけていたことを明らかにする。この解明のために、カントの教育思想を『教育学』のみならず、批判哲学と経験的な人間学や自然地理学のテクストとの両方に関連づけて考察する。</p> <p>最初にまず研究目的が提示され、先行研究が手際よく整理された後に、第1章では、道徳法則への尊厳に基づいて道徳法則を最優先にする人格性は、経験的で感性的な影響から離れて自律的に獲得されるのにたいして、邪悪性へと至る悪をなす行為は、経験的で感性的なものの影響を受けており、悪の克服にはそのような経験を生み出す社会を漸次的に改革することが求められることが示される。さらに第2章においては、第1章と同じく経験的な働きかけの重要性が、幸福の追求という観点から明確にされる。カントにおいては、感性的な幸福の追求を最優先にする幸福主義は、悪をなすことに他ならないが、他方で最高善に至るためには健康や裕福さや技術的熟達は欠かせないことであり、これは目的そのものではないにしても媒介契機として不可欠な事柄であることが示される。こうして第1章2章では、経験的な働きかけは、道徳的善へと近づくために不可欠なものであることが実践哲学の領野において提示される。</p> <p>このことを承けて、第3章では、『教育学』における経験的な働きかけの在り方が吟味される。カントは人間形成の段階を、(1)訓育以前の自然的教育、(2)訓育、(3)教化、(4)市民化、(5)道徳化、の5つの段階に分けて考察しているが、ここで道徳化までの4つの段階のマトリクスとなるのが「教化」である。従来の研究では、道徳化の契機にのみ関心が向けられてきたが、教化は悟性の下級能力と上級能力の形成を同時に促進するものであり、この教化の働きこそが道徳化の実現の条件となるべきものである。つまり教化が現実的な教育的働きかけの基底となるものであり、その教化において能力形成を促す具体的な教育こそが地理教育なのである。</p> <p>このような論を経て、第4章において、地理教育の基盤となるカントの自然地理学の成立背景とその性格が考察され、第5章のカントの地理教育の性格解明へとつながっていく。カントの自然地理学は、当時のキリスト教的自然神学的理解からも「科学的」地理学からも距離をとり、「批判的」に論じられている。そこでは、異なる土地の人生に関わる総合的な有用知を探究するとともに、他方で有用知を越えた既存の認識枠を揺さぶるような純粋な好奇心に開かれた「注目すべきもの」の探究も重視されている。カントの自然地理学は、このような多重な探究を認めるだけでなく、探究による知識を単なる集積を越えた「世界知」という理念によって体系づけようとする。異なる土地の多様な新たな事物に開かれつつ、多様な知識を有機的に連関させ主体的な一つの世界知を生み出すことで、閉じられた人種主義的ヨーロッパ中心主義を脱し、人類主義・世界市民主義を可能にするというのだ。</p> <p>第5章では、以上のようなカント独自の自然地理学が人間形成にとってどのような意味があるかが明らかにされる。地理教育では、多様な新たな事物との関わりなどを通して感官が鍛えられ、感官の感度が高められ、多様な表象が受容されるようになる。悟性もまたこの多様な表象を概念化することで力が鍛えられ拡張される。そして、自</p>			

らの能力自体を疑いうるまで強度を獲得し、批判哲学を自ら遂行することができるようになる。自らの認識を自ら脱した位置から吟味することで、論理的なエゴイズムを脱して、道徳的な行為形成が実現される。地理教育はこのようにして道徳教育の基礎をなす性格を確立し、道徳化を基礎的な場から後押しする。地理教育はこのようにして世界知を備えた世界市民という人類のあるべき姿の実現をもたらす。

そして第6章では、さらに啓蒙が地理教育の産物でもあること、かつ世界市民性を具現化する具体的な運動であることを論証し、第7章では、世界市民性に含意される人類の発展の保証において、カントは地理教育が戦争や対立といった否定的媒介契機に代わるものと考えていたことを明らかにする。こうしてカントの教育思想において、地理教育が世界市民的教育という課題を実現することが解明される。

(論文審査の結果の要旨)

カントの自然地理学や地理教育は、カント哲学研究においてマイナーな研究領域であり、注目を集めることはほとんどなかったといえる。しかし、講義義務がないにもかかわらず、カントが自然地理学の講義を40年の長きにわたって続けていたという事実は、地理教育がカントの哲学において何らかの重要な意義をもっていたのではないかという推測を抱かせる。著者は、カントがその生涯をかけて目指した哲学の成果が、世界市民の教育に結実化していること、そしてその課題実現の中心的な教育カリキュラムが地理教育であったことを、緊密な論理構成によって論証する。世界市民の教育というカントの実践的な中心課題を解きほぐすことによって、カントの自然地理学や地理教育を、単に一学問領域としての地理学上の業績としてではなく、カントの哲学全体における経験的なものと理性的なものとを架橋する重要な位置にあるものとして明らかにする。この意欲的な試みは大きな研究成果をもたらした。

著者は、カントの膨大ともいえる先行研究について広く渉猟し、また原典の綿密な批判的解釈を通して広くカントの著作全体の関係を論じるのみならず、さらにはカントの全集には収められていない、カントの地理学を受講した学生の未刊行の手書きノートを参照するなど、その研究手法は手堅くまた研究の視野は広範囲にわたっており、国内のみならず国際的なカント研究のレベルと比較しても遜色なく十分に評価できる内容となっている。世界市民的地理教育を主題とすることで、カントの哲学全体からカントの教育学・自然地理学・地理教育を問い直すにとどまらず、カントの地理教育から教育思想・自然地理学をさらにカントの哲学全体を問い直すという循環的な読解を通して、これまで論じられることのなかったカントの教育学のみならず哲学の姿を明らかにしたことは高く評価することができる。

以下さらに具体的にこの研究のオリジナルな側面を評価するなら、第1に、経験的な働きかけが、経験を超えた道德化にどのように関わるのかを論じるのに、悪の克服と幸福の追求という主題から論じていることである。従来の研究ではほとんど顧みられなかった主題から問い直すことで、カント哲学全体のなかで経験的な働きかけが経験を超えた道德化にどのように関係するかが明確になった。

第2に、教育の道德化のプロセスにおいて教化が果たす役割の意義を明確にし、そのことを通して地理教育を位置づけたことである。カントは『教育学』において教育を養育・訓育・教化・市民化・道德化の5つの段階に分けている。著者は、本論文のなかで、教化こそが経験的なものと道德化とをつなぐ要であることを論証し、その教化を具体的に実現する教育をカントが地理教育に求めていたことを明らかにした。

第3に、カントの地理教育が、論理的エゴイズムと道徳的エゴイズムの克服に寄与することを明らかにすることによって、人間形成における道德化と結びつくことなど、カントの自然地理学の意義ならびに地理教育の教育上の位置づけの明確化を実現しただけでなく、地理教育一般がもつ人間形成論的な意義についての知見を深めたことである。

最後に、世界市民の形成において地理教育が果たす役割の大きさを明らかにすることによって世界市民の形成の内容をはじめ明確に提示した点である。カントが世界市民の教育を強調しているにもかかわらず、カント自身がこの主題について体系的に論じてはおらず、そのこともあってカント教育学研究においても世界市民的教育は道德教育と同一視され特別な主題として論じられることはなかったのだが、著者が地理教育の考察からカントの歴史哲学的考察を捉え直すことで、世界市民の形成が個人的な道德化にとどまらず、さらに社会的な改革と人類の発展を目指す世界市民的社会の実現と結びつけられていることを明確に取りだして見せたことは、カント研究として特筆に値する。またナショナリズムを捉え直す意味でも今日的な価値も大きい。

以上述べたように、本研究は極めて高度なカントの人間形成論的研究として評価できる。試問において世界市民概念における他者の問題の掘り下げや、『判断力批判』とのつながりなどさらに論証を深めることでより多くの知見を引き出す可能性があることなどが課題として指摘されたが、これらの課題の指摘は、本論文の主題のさらなる発展に向けての指摘であり、本論文の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年9月3日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降